

# 入学試験問題

## 小論文出題文冊子

平成28年2月4日 試験時間90分

### 注意事項

- 1 配布したこの出題文冊子と設問・解答用紙は合図があるまで開かないこと。
- 2 この出題文冊子は表紙・白紙を除いて7ページです。設問・解答用紙は表紙・白紙を含めて4枚です。落丁、乱丁、印刷不明な箇所などがあつた場合には申し出なさい。
- 3 出題文は2つあります。2つの出題文に対する設問に全て解答しなさい。
- 4 解答には必ず黒の鉛筆またはシャープペンシルを使用しなさい。
- 5 合図にしたがって出題文冊子の表紙の指定欄及び設問・解答用紙の白紙を除く3枚の指定欄に受験番号、氏名を記入しなさい。
- 6 出題文冊子と設問・解答用紙は、持ち帰ることを禁じます。

受験番号				
------	--	--	--	--

氏名	
----	--

(受験番号、氏名を記入しなさい。)

## 出題文 1

喪中につき……

昨年も暮近くに、

「喪中につき年頭の御挨拶を欠礼いたします」

という葉書を十通ほどいただいた。私は、むろんそれらの方々に年賀葉書を出すことを遠慮した。

その前年に家族の死にあった家では、まちがって送られてくるものもあるだろうが、原則的に賀状はなく淋しい正月を迎える。

(中略)

一月一日に賀状の束が配達されてくるのは、一年間家族に不幸がなかった証拠として感謝しなければならないのだろう。

(中略)

賀状をしたための時、例年すでに亡い作家の御家族に出すべきかどうか困惑する。

一例をあげると、太宰治氏の未亡人津島美知子様に対しての賀状である。私は、三年半ほど前、太宰治賞を受けた。その発表後、津島様の御自宅を訪問しようという話もあったが、中止になった。その理由は津島様から太宰治賞は夫の作品を記念して設けられたもので、家族が受賞者の御訪問を受けることは御遠慮すべきものだと思うといった趣旨からであった。私は、この御返事に感動した。文学者というものは、あくまでも個であって、血縁の者とも完全に隔絶されたものなのだ。

しかし、私は、賀状ぐらいはお出ししたいと思い、その後、年の暮になると万年筆をとり上げるがどうしても宛名を書く気にはならない。太宰治氏の御遺族だけではなく、一年以上前に亡くなられた文学者の御遺族に対しても同様なのである。

この逡巡の理由は「喪中につき……」という年賀欠礼の文句が私の頭にこびりついてはなれないからである。

私には、文学者の御遺族が果てしない服喪の中にいるように思えてならない。一年以上前に亡くなられた文学者の御遺族は、すでに喪も明けたはずである。しかし、私

は、御遺族が毎年年の暮に、「喪中につき年頭の御挨拶を欠礼いたします」という葉書を出しているような気がしてならないのである。

私にそうした錯覚を起こさせるのは、文学者そのものの本質から発したものだと思う。

文学者の死というものは、年齢の如何を問わず、作業半ばの死であり、突然の断筆でもある。文学者の死には、こうも書きたいああも書きたいと願いながら、それが果たせないで終る根強いうらみつらみを感じられる。その怨恨が長々と尾をひいて、遺族を喪から解き放さないのではないだろうか。

文学者は、肉体が消滅しても作品の遺る可能性がある。一般の人々の死と比較して、それは最大の特権であり、それだけでも充分ではないかという声もある。しかし、文学者には、これでよしと満足する終点がない。商人に隠居が、官吏、会社員に定年退職があるのとは異なって、文学者は、果てしなく筆をにぎりさらに傑作をと願う。それが肉体の死によって、容赦なく完全に断たれるのである。

私は、昨年暮、津島美知子様宛に賀状を思いきって出した。しかし、喪中の御遺族に賀状を送ってしまったような深い悔恨を今では感じている。

【吉村昭：『その人の思い出』より 河出書房新社 2011年】

## 出題文 2

第二次世界大戦で敗北した日本。そのとき満州(中国東北部)に住んでいた筆者は幼い子供(正広 5 歳, 正彦 2 歳, 咲子 0 歳)とともに日本本土をめざして朝鮮半島を南下するが、平壤付近で足止めされ半年余り日本人コミュニティーで暮らしている。時は 1946 年 5 月。彼女の所持金は 100 円。金目の物はシベリアに連れ去られた夫が残して行った時計だけである。

「お母ちゃん」

正広の音がする。

「どうしたの、正広ちゃん」

「のどが苦しいよ」

正広は私がそばを離れるのがいやらしい。今まで風邪を引いても独りでおとなしく寝ていたのに今日に限って心細いことをいうので変に思っていた。午後から正広の熱は上って来た。のどが痛いとか、苦しいとか、しきりに私にうたっている。悪い風邪を引いたに違いない。私は正彦のことでこりごりしているから、あまり悪くならないうちにと思っただけで傍について見てやっていた。日が暮れてから熱は異常に上昇した。頭に置いたしぼり手拭からもうもうと湯気が上って来た。

「肺炎に違いない」

王谷先生のところへ東田さんが呼びに行ってくれたがいなかった。死にそうな病人が三人もいて手が廻らないとのことであった。

(中略)

私は正広を背負った。重い正広は火の玉のように熱く感じられた。私は町で一番大きい病院へ急いだ。待合室には誰もいなかった。私は金策を東田さんにまかせて来た。その金策がなんとかなるように心で祈っていた。診察室に通され、正広の咽喉を見た医師は首をかしげて引込んだ。そして再び出て来て二人の医師が代る代る診てから、

「ジフテリヤです」

と聞いた。私はそれを死刑の宣告のように聞いた。

「お気の毒ですがここにはジフテリヤの血清がないから、すぐ救世病院へ行ったらよいでしょう。あそこにはあるかもしれません」

「その血清はいくらぐらいかかるでしょう」

私はそばに立った小柄の女医に聞いた。

「千円ぐらいかかるでしょうね」

女医さんは正広の顔を気の毒そうに見ながらいった。私は女医さんから聞いた道順をたどって救世病院へかけつけた。

橋を渡ると大きな赤煉瓦の教会の塔が民家の屋根から突き出して見える。救世病院はその隣りであった。救世病院と書かれた木の札の上に白い大きな十字架がかかっていた。

「教会でやっている病院に違いない」

私はその中が別世界のような気がした。門を入ると綺麗な庭があった。柳の葉が緑の芽を出して白い建物の美しさを引き立てていた。すぐ診察室に通された。テーブルの上に日本語の医書とドイツ語の医書が並べて置かれている前に白衣の若い医師が坐っていた。入って行く私の姿におだやかな視線を包むように投げかけて来た。

「どうしました」

背中から下した正広を見て、そういった。私は手短かに経過を話した。うなずいて聞いていた医師は、

「どれ診ましょう」

といて聴診器を取った。

「ジフテリヤですね、大分進んでいる、奥に白い斑点が見える」

私に説明するように、またそばに立っている助手の人に説明するようにいった。

「すぐ血清の用意をして下さい」

助手の人にそう命ずると、医師は急にいそがしそうにその辺をとり片付け始めた。

「あのちょっと、その血清はおいくらぐらいするのでしょうか」

医師は振り返って私の顔を探るように見つめていた。医師の顔が緊張から、静かに憐愍れんびんの顔に移っていくのを見てとって、私は正広を抱きしめて泣きくずれてしまっ

た。

「すみません、千円のお金はもっていません。出来るだけ集めて東田さんが後から参ります、でもとても千円今すぐお払いは出来ません、でもこの子が、この子が……」

私はもう医師の顔をまともに見ていられなかった。涙のベールが、私の視界をさえぎって、その向うに、医師の白衣が幾重にも重なりあっていた。白衣は大きく揺れて近づいて来た。

「奥さん、さあ血清の用意が出来ました。坊ちゃんをこっちの方へ向けて」

医師の言葉は私の頭の上で鳴るようにひびいた。すべてを了解して血清を打とうとしている医師の前に、私は涙を拭く余裕がなかった。顔色一つ変えないで静かに助手の人に注意しながら血清を打ち終った医師は、

「もう大丈夫ですよ、奥さん」

といった。

「有難うございました」

私はただ泣くだけであった。

「藤原さん、ちょっと」

ドアーを細目にあけて東田さんが顔を出した。注射の済むのを待っていたのであろう。私は東田さんの顔を見て、金策は不成功だと見てとった。

「藤原さん、どうしても三百円しか集まらないんです。そしてね、時計はどこへ行っても二百五十円でしか買ってくれないんです。だから時計は持って来たわ」

「有難う、東田さん、よくここが分ったわね」

「ええ、あの病院の女医さんが教えてくれたわ」

私は時計と三百円を持って診察室へ入った。私はすべてを正直に話そうと思った。私は医師にまず謝罪しなければならない。

「すみません。お金を用意して来ないで、血清を打って戴いてからお願いするなんて……」

私は全部のことをありのままに話した。医師は黙って聞いていた。

「奥さん、千円下さいと誰がいましたか」

おだやかに私に質問した。そういえば千円、千円と私は勝手に値段をきめていたのだった。

「すみません、私は前の……」

医師はそれを押えつけるようにいった。

「私はまだ処置料を請求していませんよ」

医師は軽い微笑を浮かべて私にいった。

「どれ、二百五十円の時計を見せて下さい」

医師は私の手からロンジンを取るとテーブルの上の洋書の上に置いた。

「ほう、ロンジンですね」

医師は私の顔を見ていった。

「あなたの御主人が持っておられたんですね」

「そうです、私と結婚する前から持っていたものです」

「失礼ですが、あなたの御主人は何をやっておられたんですか」

「气象台におりました」

「科学者なんですね」

私はそれには答えなかった。医師はロンジンを耳元に持って行って、セコンドを聞きながら何か考えているようだった。そのセコンドの音が私の胸に響いて来るほど診察室は静かであった。

「私がこの時計を千円で戴きます」

医師は厳然というと、部屋の隅にいる会計の人に何か朝鮮語で早口にいった。会計の人は納得行かないように振り向いたまま眼を見張っている。

「僕が全部負担するっていつているんですよ」

今度ははっきり日本語でそういった。会計係りはまだ完全に了解しないようであった。助手の人が立って行って説明していた。私は茫然としていたが、この上医師に甘えてはならないと思って、

「それではあまりです。ではこの三百円を受け取って下さい」

医師は頭を振ってそれを押し返した。そしてすべての取引きがすんだかのように自分の席に向うと、

「明日もう一度来なさい」

そういつて、助手に次の人を呼び入れるように眼で合図した。

私が立ち上って帰ろうとすると、

「希望を失わないで、日本へ帰るまで頑張りなさい」

と静かな声で送ってくれた。

【藤原てい：『流れる星は生きている』より 中央公論社 1984年】